

消滅世界 下



大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の  (次ページ) をクリックするか、キーボード上の  キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	9
第九章 薩摩硫黄島	19
第十章 客員研究員	37
第十一章 コメンテーター	68
第十二章 哨戒作戦	96
第十三章 襲撃	124
第十四章 転生	152
第十五章 ドレッドノート	182
第十六章 虚空間	208
エピローグ	243

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。しかし、また妙な任務に駆り出され……。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあやか
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。

うるしげらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

い いかけら
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

み どうそう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこう じ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにし まさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしやう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまひひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊 (WAIR)〉

しばひかる
司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

〔長野県龍野町警察署〕

いわのみしんご
岩波伸吾 警視正。警察署長。来年定年を迎える。

かみじやうたくや
上条卓也 警視。副署長。岩波より二〇歳も若い県警の急行組。

やまざきあきら
山崎輝 巡查部長。

みやしたゆりか
宮下友梨香 巡查。二〇歳になったばかりの新米警察官。

らもんまさむね
羅門正宗 准教授。本家サイコップの日本側代表者。専門はリモートセンシング。

とねがわたくし
利根川卓 信州大学の名誉教授。専門は量子理論。

☆謎の存在

えのきだもえ
榎田萌 住人が消えた長野の集落から唯一発見された。目覚めた時には「孔娜娜」と名乗る謎の人物。

〔戦艦大和〕

いちじはやと
伊地知隼人 海軍少将。連合艦隊作戦参謀。薩摩閥。

きむらやすこ
木村康子 技術少佐。博士号を二つもつ才女。

リノミン
李盧民 伍長。衛生兵。

かぐらまくらこ
神楽桜子 主計軍曹。伊地知隼人大佐の従兵。

〔第十七駆逐隊〕

ナムチヨヨン
金主永 大佐。伊地知の部下だったが、今は大佐に昇進し第十七駆逐隊を率いる。

〔特高警察〕

あまかすあきひこ
甘粕昭彦 警部。満州生まれだが特高警察のやり手。外見は風采の上
がらない平凡なサラリーマン。

〔台湾海軍陸戦隊〕

しばあゆむ
司馬歩 少佐。台湾海軍陸戦隊を率いる。日本軍のミスコンでは毎
回優勝を攫う美女。国籍は台湾だが、育ちは横浜。

消滅世界
下

プロローグ

夜、標高一六〇〇メートルを越える尾瀬沼^{おげぬま}ビジター・センターは、零下に冷え込んでいた。山開き直前の今、一帯はまだ静けさに包まれている。

環境省のベテラン・レンジャー・待田^{まちだ}晴郎^{はるお}は、晩飯を食べながらそわそわしていた。食後には全国に拡大しつつある学生デモのニュースをテレビで見ながら、荷物のパッキングをはじめめる。

広大な尾瀬エリアの西端にある山の鼻^びビジター・センターからの連絡をずっと待っていたが、それは一向に入らない。

「落ち着いてくださいよ、待田さん。先生はベテランだし、どこかでビバークしてるんでしょう」

同じレンジャーで部下の吾妻^{あづま}大樹^{おほき}が、缶ビールを開けたような表情で言った。吾妻の右手は、人差し指と中指の先が無い。K2に挑んだ時の置き土産^{みやげ}にしたというのが、彼の主張である。

二人とも山好きが高じてこの仕事についたが、登山スタイルはまるで違う。吾妻はひたすら高い山を目指すアルパインスタイルのクライマーだが、待田は、さして高度のない国内のネームレス・マウンテンのルート開拓に情熱を傾けている。人が入れないというところに、わざと入っていくタイプだ。

もちろん互いに一通りの技量は身につけている

ので、国内では一緒に山登りをする機会も多々あった。

「いや、連絡を超越さないのは妙だろう。あの人は、自分のスケジュールはしっかり守る。何かの事故があつたとみていいんじゃないか」

「でも、この辺りは登山道が整備されているし、山に登ったわけじゃないですよね」

「ああ、目的は鹿の食害調査だから登ってはいないと思うが……。でも危険な場所はあるし、先生も、それなりのお歳だし」

「ツェルトくらいお持ちなんでしょう？」

「いや、何年か前に聞いたことがある。こんな場所です学者がツェルトなんて持ち歩いていたら笑いのことになるから、私は持たないとね。あの先生、重くなるって言って無線機も持たない主義だから」

「……不用心だな。このエリアは、過去何度も学

者先生たちが遭難しかけたことがあるのに」

ここで待田は「仕方無い」と腰を上げた。

「明け方にはまた降りそうだ。テントを持って探してくるよ」

「え?! 探すと言ったって、この広さですよ」

「至^{しづ}仏山^{ぶつざん}近辺だろうと思うんだ。昨日出発前に話した時、あの辺りでの鹿の出没を、かなり気にされていた様子だったから」

「なら、山の鼻の連中に搜索を依頼すればいいのでは。すぐそこですし」

「いや、山開き前の準備でみんな疲れている。応援が必要ならそうするよ。あの先生、気難しい人だから、もし無事だとしたら変に騒いだと文句を言われても何だし」

「じゃあ、俺も行きます」

「お前はここにいてくれ。登山者も、もう入っているんだ。ここを無人にはできない」

「白砂峠は、まだぼろぼろですよ。今年の雪は酷かったから、復旧整備が追いついていない」

「それを言ったら、ああいう危ない場所はそれこそ山ほどある」

「俺らの脚でも、至仏山までは五時間かかります。まして今は夜中ですし……」

「途中走れば、三時間で着く。君は去年のトレイルラン、燧ヶ岳經由で二時間で走ったじゃないか」

「あれは昼間で、しかも荷物は水だけでした。それに、もう一度やれと言われてもご免ですね。僕スタイルじゃない」

待田は無線機一つと衛星携帯をザックに入れると、ヘッドランプ一個を頭のヘルメットにつけ、更にもう一個をザックに入れた。マグライト一本は、腰のポーチに収納する。

ザックの底には、四〇メートル・ロープが一本

とハーネス類も入っている。追加で持参する二人用のテントとポール、医療キットを含めると軽く一〇キロは越える荷物になった。

「……至仏山に取りかかる前に、必ず連絡をくださいね」

「その時間には、お前は寝てるだろう」

「起きてますので！」

吾妻はダウンジャケットを羽織り、ビジター・センターの外まで待田を見送ってくれた。このビジター・センターを囲むように山小屋が建っているが、もちろんまだ人はいない。

外は真つ暗だ。吐く息は白く、今にも雪が舞いそうな気温だった。予報では、夜明け前に天候が崩れるそうだが、降るのは雪なのか雨なのかは微妙だという。この辺りは、六月過ぎまで雪が残ることもあるのだ。

「待田さん、この気温では木道は凍って滑ります。

くれぐれも、お気をつけて」

「わかった。一応、山の鼻へ連絡を入れておいてくれ。では、いつてくる」

ヘッドランプを点して出発する待田を見送った吾妻は、早々に建物に戻ると、尾瀬ヶ原湿原の西端にある山の鼻ビジター・センターに電話を入れ状況を伝えた。

この状況下では、もし遭難者を発見しても夜半の救出は無理だろう。しかし待田は、装備一式を持つているから、半日ぐらいは耐えられるはず。遭難者がたいした怪我をしていなければ、だが。また、発見できるかどうか問題だった。

一方、待田は走りながら、昨年、観光シーズンが終わった後に開かれたトレイルランのことを思い出していた。錚々たる面子を集めて、試験的に行われた競技会だ。もちろん、こんな観光客が多い場所でのトレイルランなんて非常識だという声

が大きかったし普段は禁止されているが、話題作りにはなった。

一時期の尾瀬は、観光客でパンクすると懸念されていたが、レジャーの多様化や人口の頭打ちで、幸いそうはならなかった。逆に、日帰り観光が増えたことで、山小屋がどこも経営難に陥ってしまっている。

尾瀬沼沿いに走り、沼尻から峠に分け入った。峠といってもほとんど下りなので、体力を使うことはない。ただ、悪路というだけのことだ。

所々で道が消えている。斜面に作った道は沢に流されていた。比較的観光客が多いルートとしては、ここは最悪の場所である。

時々、ホイッスルを鳴らしながら峠を走り下る。確か先生も、お守り代わりにホイッスルを身につけていたはず。この音が聞こえたら応じるだろう。見晴に出ると、ここからは大絶景が広がる。空

はまだ穏やかで、満天の星空だった。この高度までくると、夜空も澄み切っている。

ここから、尾瀬ヶ原湿原の中央をまっすぐ二時間突っ切ることになる。竜宮小屋を出た十字路で、待田はようやく休憩をとった。ベンチに腰を下ろし、持参したゼリー飲料を口にする。辺りはまだ一面の雪景色だ。雪が無いところは、湿原の水たまりが露出している。

夜空を見上げながら、時間を確認した。自分が立てたタイム・スケジュールより、三〇分も遅れている。ここから時間を稼ぐためストックをザックのサイドにしまい、ザックのウエスト・ベルトも先ほどよりきつく締めなおす。

いつもならこの星空を満喫しながら歩くが、今夜はその余裕は無さそうだ。しかし、この夜空を独り占めしていることは事実である。待田は、思わずにんまりと笑ってから、再び木道を走り出し

た。

木道のどこが痛んでいるか、がたついて浮いている位置も全て把握している。鹿が食い散らかした後の水芭蕉のシーズンまでは、まだしばらく時間がある。それまでに修繕する予定だったからだ。竜宮から四〇分で、山の鼻まで走り切った。左手に見えるのが山の鼻ビジター・センターだ。ホイッスルを独特の符牒ふちようで鳴らすと、向こうからも合図のホイッスルが聞こえてくる。こちらの存在を確認したという意味だが「なんて物好きだな」と言っているようにも聞こえて、待田は苦笑した。ここからは、ひたすら登りになる。これが昼間なら、背中に尾瀬ヶ原を挟んで燧ヶ岳を拝めるが、夜は視界が無くひたすら苦行が続くのみ。そして、危険も多い。更にホイッスルを吹き、反応を探す。二時間の直登ちよくとうだが、ここは四〇分で登り切りたかった。下部の灌木地帯かんばくを抜けると、視界は三

六〇度開ける。膝より高い植物はなく、そのせいで風は吹きさらしだ。遮るものはない。

鹿はここまででは上がってこない。食べるものが無いからだ。ということは、先生がわざわざ頂上まで行く必要も無かったはずだが、彼女はいつも山へ入ると、健康のためと称して頂上まで登りたがる。

灌木地帯を抜け本格的な登りになると、案の定風が出てきた。真正面からの風で、身体が押される。この風のせいで、周囲の音が聴き取りづらくなる。

だがホイッスルを一吹きした後、風が一瞬止んだ瞬間、その声は聞こえてきた。しばらく耳を澄ますと「ここよ」と叫ぶ声も聞こえる。左手の、から沢方向だ。谷底から聞こえた。

待田は、ピピピ——とホイッスルで応じてから「動かないでください！」と声を張り上げる。

すぐに山の鼻ピジター・センターにいる仲間遭難者を発見したことを伝え、これから沢へ降りることも報告した。

だが、降り口は無い。相当にきつい斜面だ。一〇〇メートル以上は降りなければならぬ。そしてルートを探して、もう一〇〇メートルほど登らねばならなかった。

急斜面を滑り下りると、涸れた沢に出た。まだ雪が残っている。当然、カチカチに凍っていた。持参したアイゼンを装着する頃には、冷たい雨が降りはじめた。

慎重に下った。ここで慌てては、二重遭難になりかねない。ヘッドランプのビームで前方を照らすと、女性が手を振っているのが発見できた。

「ご無事ですか、先生」

「遅かったじゃないの。待ちくたびれたわ」
呼びかけると、相手はほさほさの髪のまま応じ

た。小さな岩の上に腰を下ろし、震えている。

「よかった！ お気に入りのニット帽はどうなされたんですか」

「その辺りに落ちているはずよ。鹿の親子を見つけて樹林帯へ降りようとしたら、ちよっと転んでしまつて——」

「ちよっと転んだ？ そういうのは、滑落かつらくと言うんですけど」

「でも、たいしたことはないわよ。足首を、ちよっと挫くじいた程度です」

右足の足首には、タオルが巻かれている。

「ホイッスルはどうなさつたのですか」

「それなのよ！ マーフィーの法則かしら。出かけに忘れたことに気づいたけれど、今日に限って取りに戻らなかつたの」

「そうですか。ひとまず、テントを張りましょう。本格的に降つてきそうですし、風ももつと強くな

る」

すぐに待田は平らな場所を探し、慣れた手つきでテントを張つた。そして、彼女を背負つてテントへ入れる。

「あなた、温かいコーヒーとかは持つてない？」

「そう言われると思つて、固形燃料とコッヘルは持参しましたよ。でもそれは後にして、先に足の怪我を見せてください」

足を確認すると、巻かれたタオルが赤くなつて

いる。

「……先生、これは挫くじいたとかじゃなく、開放骨折と言うのですが」

「あら、そうなの？ 歳のせいとか、痛みをあまり感じなくてね。これも骨粗鬆こつそしやうしやう症しょうつてやつつのせいかしら」

「ひとまず消毒して、包帯を巻きます。今はその程度のことしかできません。私の知り合いに、外

傷治療がうまい奴がいたんですけど」

待田は、テントの中で固形燃料を燃やして水筒の水を温める一方、痛み止めの薬を飲ませながら応急措置を施した。

「これでよしと。先生、心配したんですよ。これからは、無線機くらい持参してくださいね」

「あなたみたいなベテランがいてくれるから、私は安心して山にも入れる。それで十分じゃないの」

応急治療が終わると待田はいったんテントを出て、救出計画に関し、山の鼻の同僚と無線で話した。ここは山の鼻ビジター・センターと目と鼻の先だが、暗い中で担架を担いでおいそれと上り下りできる場所ではない。

だが彼女の年齢を考えると、夜が明けてから動くというのも酷だと待田は思った。それなりに安全なルートは、手前に切れる。それに担架を使う

必要も無い。

小柄な女性一人なら、救命用リーフキャリアで背負って運べるだろう。足首以外に損傷が無ければ、だが。

それをしっかり確認する必要があるが、ここから脱出して山の鼻經由で鳩待峠はとまちまで上げれば、夜明け前には救急車にバトンタッチできるはずだ。

結局、救出計画については、尾瀬エリアの最もベテランである待田の意見が採用された。

彼女は、環境省の委託で鹿の食害調査に当たっている。その安否には、お役所としての責任があった。

待田はテントに戻った後、すぐ救助がくること、夜明け前に鳩待峠まで担ぎ出せることを伝えた。他に負傷していないかを確認すると、手首の骨折、そして腰も強打していることをししぶしぶ認める。

これでは背負ったの搬出は難しそうだが、担架

でなら担げる。幸い、ここから山の鼻までは下りだし、鳩待峠までの登りはすでに木道も補修済みで危険な場所は無い。あとは、担ぐ人間の体力だけだ。

怪我人の搬出はレンジャーの仕事ではなかったが、何でも屋でもある彼らは、時々訓練をしていた。

下から登ってくる仲間にもルートを案内すると、テントへ入って二人でコーヒーを飲む。

「外傷治療がうまい人って、もしかして、あなたの軍隊時代のお知り合い？」

「そうです。確か、上官でした。……ああ、でも名前は何だったかなあ。顔とかも、よく思い出せないんです。外科医より縫合がうまいって言われていたんですが」

救助隊といっても、山の鼻のセンターには二人しかない。だが、現れたのは三人だった。驚く

ことに、吾妻も混ざっていたのだ。しかも、恐ろしいぐらいの薄着で、よく見るとランニング・スライルだった。

「まさかお前、走ってきたの？」

「はい。昼間なら一時間を切る自信があつたんですけど、暗いせいで九〇分もかかっちゃいました」

「やれやれ。……でも、軍隊出身の俺たちなら、先生の担架を鳩待まで担ぎ上げられるだろう」

「そういうことですね。救急車の方が遅くなったりして」

担架に負傷者を固定すると「なんだか私、遭難したみたいで惨めだわ」と彼女はほやいた。

「その惨めさを、しっかりと覚えておいてくださいね。最初に最後にするために——」

藪の中を下りはじめると、鹿の群れがあちこちに潜んでいることがわかった。眼光が反射するの

だ。

鹿による食害は尾瀬にとって長年の頭痛の種だが、未だにこれといった解決策は無い。

先生には一日も早く回復してもらわねばならないと、待田は考えた。

第九章 薩摩硫黄島

屋久島の北西四〇キロに浮かぶ硫黄島は、太平洋戦争で激戦となった硫黄島と区別するために、しばしば「薩摩硫黄島」と呼ばれる。

しかし、地元ではそう呼ばれることは無い。硫黄鉾山が閉鎖された半世紀前から人口は減り続け、今は一〇〇人を切っている。孤島とはいえ屋久島より鹿児島本土に近いので、村営のフェリーも週二便通っていた。

民宿も何軒があるが、利用するのはもっぱら公共事業で訪れた工事関係者だ。短い滑走路を持つ村営空港も、セスナを利用した定期便は、あつて無いようなものだった。観光客はもとより、外国

人が訪れることも滅多に無い。

だが、若い中国人の四人組がフェリーで島に現れた時には、別段騒ぎにはならなかった。彼らは上海で高級レストランを経営する一族で、島で獲れる伊勢エビ漁の現場を見たいと事前に伝えた上で訪れたからだ。

村は他にも、特産である牛や椿オイルを売り込むために、特別に彼らへ役場の支所長を案内役に付けた。

支所長の西川新介は、この島ではなく屋久島のさらに東にある種子島の出身だった。まだ若く、この島で暮らす大人の中では一番若いほどだ。も

ちろん、島で暮らす唯一の公務員である。

幸いなことに西川は、若干の北京語も喋れたので、接待役にはもってこいだった。

ただし昨今の状況から、中国人観光客は警戒せよと県庁から注意も受けている。土地の売買の話が出たら、やんわり拒否するよう命じられていた。

その日の早朝、西川は中国人の一行が会社の従業員を招いたということで、村営空港にいた。

滑走路を端から端まで歩く。路上のひび割れを確認し、草を抜き、石を拾って降りてくる飛行機に備えていた。

双発のツインオッター機は、ごくまれにしか島へは来ない。一年で一度あるかどうかだ。

その機体は、彼がこの島に赴任してからの二年間で、初めて見るものだった。着陸はともかく、あんな大きさの機体が六〇〇メートルしかないこの滑走路で離陸できるのだろうかと不安になった。

滑走路の半分ほどを走って機体が止まると、南端まで動き乗客を降ろしたようだ。二〇名近くが乗っていて、皆お揃いの大型バッグを抱えている。

西川は、どうしてあんな所で降りたのだろうかと言ふが、飛行機はその後一八〇度ターンすると、そのまま滑走して北へと離陸していった。

島にタクシーの類いなどは無い。かと言って、役場のワゴンに乗り切れる数でもなかった。迎えに出るわけにもいかず、彼らがターミナルまで歩いてくるまで待つ。

一行はターミナル・ビルに近づくと立ち止まり、リーダーらしき男が携帯で電話をかけた。そこで西川は、少し異様な印象を彼らから受ける。全員が短髪の男。そして皆若く、よく日焼けしているのだ。

レストランの厨房などではなく、軍隊にいな男たち——。

その時に至っても、西川は、彼らは民宿に予約をきちんと入れているのだろうかということを考えていた。この数の客は、おいそれと受け入れられるものではないからだ。

リーダー格の男は電話を終えると、サングラスを外して「コンニチハ」と挨拶してくる。

「ソンチョウ、さん？」

「いえ、私は村長ではないのです」と、西川は北京語で応じて自己紹介をした。

「そう、西川さん！ 北京語は、確か軍隊で学んだんだね。お見事です。ところで、携帯通じますか？」

相手は、自分の手に持ったスマホを振って見せた。先ほど電話をしていたはずだがと奇妙に思いながら、西川は口をひらく。

「そのはずですが、中国のスマホがここでローミングでできたかどうかは——」

「いいえ、私は、あなたのスマホが通じているか、それを知りたいのです」

西川は、自分のスマホをポケットから取り出した。

「……おや、変ですな。旗が立っていない。この辺りでは、携帯は通じたはずだけだ」

流行の高速回線はないが、携帯自体は繋がっていたはずだ。しかし、今アンテナは立っていないかった。

「通じてない？ それはよかった！ ああ、いえ、日本人にとってはよくないことですな。しばらく、電話は使えません。せいぜい、二時間くらいだと思ってください。皆さんの安全を、脅かすつもりはありません」

「はあ……」

自分の北京語の読解力の問題だろうか和西川は首を傾げた。何を言っているのか、さっぱり理解

できなかつたのだ。

「われわれは、中国軍です。人民解放軍の海軍歩兵の中佐です。私は、万哲^{ワンヂャ}海軍中佐。そしてこの三日間、あなたがお世話してくださつた若者たちですが、あの四人組の代表は、段^{トウファン}樂^ラ駒^{チユイ}海軍大尉です。色々と、ありがとうございました」

「……軍人？」

「そうです。この島は、われわれ人民解放軍が接收します。しばらくの間です。島民の生活は、決して邪魔しません。もちろん、安全もお約束します。そして、いつかは帰ります」

西川は、ここで自分の血の気が引くのがわかつた。港にいろはずの段樂駒も、気づけばこの場所に現れている。

「これは、尖閣^{せんかく}の報復ですか」

「そういうことになります。ただし、永久に居座ることはないでしょう。こんな小さな島を守り切

れるものでもないし。日本軍が尖閣諸島から撤退したら、われわれもここから平和的に去ります。なので、協力してください。われわれの仲間が、間もなく港へも入ります。兵士と装備を陸揚げして占領が完了したら、携帯網を復旧させます」

「これは侵略だ！」

「でも、最初に尖閣でそれをやったのは、日本でしょう？ 大丈夫ですよ、西川さん。あなたが沈着冷静に振る舞ってくれさえすれば、誰も怪我はしない。われわれは、静かに引き揚げます」

兵士たちはバッグの中から銃を取り出すと、マガジンを装着しはじめた。

「段大尉、一個分隊を率いて港に戻り、本隊の到着を支援せよ！ ただし、可能な限り銃は隠せ。発砲は厳禁だ。西川さんにも、同行してもらつた方がいいだろう。荷役作業がうまくいく。私は、ひとまずターミナル・ビルに指揮所を開設する。」

兵士の上陸が完了し次第、各所へ展開する。皆、手順通りだぞ！ てきばき急げ!!」

西川は、島民の数を考えた。一〇〇名ちよつとだ。

妊婦はいないが、子供はいる。それに、工事関係者が十数名。

せめてこの兵隊たちが、自分たちの分の食料を持参してくれていることを祈りたかった。

原田拓海海軍少佐は、その朝、西原にしはらの第一中学の裏手にある賃貸マンションの自室で、まだまどろみの中にいた。

昨夜のフライトの帰還は、深夜になった。今日の出は昼からだ。先ほど中学校の始業のチャイムが聞こえてきたから、今の時間は八時半だろう。

都会では学生デモが盛んで地元の大学でも自治

会が運動しているとのことだったが、何しろここは田舎だ。政治のことなど、心配しなくてもいい場所である。

腕の中では、目覚めたらしい妻が身動きしていった。

「……おはよう。君、今日は講義があるんじゃないの?」

「午前中は、例の騒動で休講になったの。学生がそわそわしているらしいから」

「ふうん、こんな田舎でもデモをするんだね」

「まさか。教授たちが脅しているから、デモなんてないわ。デモに参加した子は、各県の採用担当へ報告するという話になっていくからね。皆、就職第一なのよ。そういえば、水野みずのコーチが釣りに行こうって。先週末、同僚が佐多さたでイシダイの大量を上げたって言ってたけど、うちは釣りより子作りの方が大切だから……。返事はわかってるわ

よね？」

妻はそう言うのと、腕を搦めてきた。

「昨日は遅かったんだ。あと三〇分、寝かせて

……」

「駄目」

突然、遠くからサイレンが聞こえてきた。基地のサイレンだ。独特の間隔で鳴るが、事故のサイレンではなかった。

それを耳にした原田は、ガバッと飛び起きる。

「フライトスーツを！」

「え、事故なの」

裸同然で隣で寝ていた妻も起きあがった。

「いや、あれは事故以外の非常召集だ。全員、ただちに出勤せよって意味がある。……何だろうな、今日は訓練があるなんて聞いてないけど」

家から基地までは、一キロもない。

だがサイレンに続いて、P-1哨戒機が凄まじ

いエンジン音を発して離陸していくのもわかった。いつもとは違う、緊急発進だ。

「捜索救難ならこんな召集はしないから、本当に何だろうか」

妻は自分の身支度の前に、原田の着替えを手伝ってくれると、最後に抱きつき、両腕を艶めかしく首の後ろに回した。

「いい？ あなたは、何があっても乗組員をきちんと家族の元に帰し、あなた自身も笑顔で私の元に戻ってくるんですよ？」

「わかってるよ、奥さん」と、原田は熱い口づけで彼女に約束した。

その後、マンションの階段を駆け下り自転車に乗る。中学校の横を全力で走り、向かいにある海軍鹿屋基地に飛び込んだ。ゲートでは、近郊に住む隊員のマイカーが渋滞を起こしている。

司令部ビルの作戦室に入ると、第一航空戦隊司



★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。